
~XデジモンフューチャーズX~

大学芋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼XデジモンフューチャーズX＼

【Nコード】

N6773X

【作者名】

大学芋

【あらすじ】

時は2032年…

デジタルワールドでは、新種のデジモンによって崩壊の危機に陥っていた。

そんな中、デジタルワールドに危機を感じたデジモン達は、現実世界に住む子供達に助けを求める。

今、現実世界とデジタルワールドを股にかけた冒険が始まる！！！！

～プロローグ～

「????」

ここはデジタルワールドのどこかにある森の中、そこに2つの影が…

そのうちの一人は黒髪の青年でゴーグルを首にかけている。もう一人は茶髪のオールバックの中年男で、あごにひげを生やしている

黒髪の青年「本当に一人で大丈夫なのか…?」

茶髪の中年男「なんだお前?おれが死ぬとも思っているのか?」

黒髪の青年「…しかしおまえ一人では心配だ…」

茶髪の中年男「大丈夫、安心しろ、おれは強いから」

茶髪の中年男はそう言つと、青年の頭に手をおき、まっすぐな目で青年を見つめる

黒髪の青年「…わかった…、絶対に死ぬなよ…?」

茶髪の中年男「わかってるって」

黒髪の青年「じゃあ、俺がいない間、デジタルワールドを頼んだぞ…」

そういつと、黒髪の青年はポケットから不思議な形をしたケータイのようなものを取り出し、近くにあった木にかざす。すると、木の

前に光の穴が現れる

黒髪の青年「いつになるかはわからないが、俺は必ず戻ってくる…、だから、絶対に死ぬなよ…?」

茶髪の中年男「おいおい、いったい何回言っただよ」

茶髪の中年男は笑う

黒髪の青年「それだけ心配だということだ…」

茶髪の中年男「そうか、だが安心しろ、俺は絶対に死なない、だから、お前も頑張れよ…」

黒髪の青年「ああ…、じゃあ、また会えると信じてる…」

黒髪の青年はそういうと、光の穴の中に入っていく。すると光の穴は消える

茶髪の中年男「炎真^{えんま}…、すべてはお前にかかっている…」

茶髪の中年男はそういうと、その場を去る

「プロローグ」(後書き)

どうも、みなさんはじめまして、この小説の作者の 大学芋
です。

とあるデジモンの小説を読んでいたら、自分も小説を書きたくなっ
てしまって、書きちゃいました！

自分は小説を書くのが初めてなので、かなりぐだぐだになると思っ
ますが、温かい目で見えていただけると嬉しいです。

では、また次回、お会いしましょう？

第一話　く冒険の始まりく（前書き）

ども、大学芋です

出だしのほうはあんまり深い意味はないんで気にしないでください

では、第一話ぜひ最後まで読んでください

第一話、スタート！！

第一話　く冒険の始まりく

ここは東京都にあるとあるマンション

その一室から朝早くから叫び声がする

く204号室　斎藤家く

????「うわあああああああ!?!」

青年はいきなり叫び声を上げながら起き上がる

????「あれ?　夢?」

そう言うと、青年は辺りをキョロキョロと見渡す

この青年の名は斎藤　裕さいとうゆう

高校1年生である

ユウ（何だったんだ?今の夢は…）

どうやらユウは悪夢を見ていたらしい

枕や服が汗でびっしょりだ

するとキッチンの方から母親の声が聞こえてくる

母親「ユウ?朝から大きな声出してどうしたの?」

するとユウは汗でびしょびしょになった服を着替えながら答える

ユウ「何でもない!」

母親「そお?じゃあ早く学校に行く準備しなさい」

ユウ「わかってるよ」

母親「あ、そうそう、春奈ちゃんもう外で待ってるわよ」

ユウ「まじ!?!」

母親の言葉を聞いたとたんユウの顔色が悪くなる

ユウ(やばい...)

ユウは急いで着替え、机に置いてあるゴーグルを首に掛け、リビングへ急ぐ

母親「ユウ、朝ご飯は?」

ユウ「ごめん、今日は知らない」

そう言うとユウは仏壇の前にいく

仏壇にはオールバックで茶髪の中年男の写真と二つのグローブが置いてある

ユウ「いつてくるぜ... 父さん...」

そう言うとユウは急いで玄関を出る

ユウ「じゃあいつてき…」

???「おそい(怒)」

と声が聞こえるとユウ目掛けてカバンが飛んでくる

ユウ「あぶなっ(汗)」

それをユウはしゃがんでよける

ユウの目の前には髪を2つにまとめた茶髪の少女が立っていた

この少女の名は小林 「はやしはるな」 春奈

ユウのクラスメートであり幼なじみ

ユウ「ハルナ…、このかばん当たるとけっこー痛いんだけど(汗)」

ハルナ「んなこと知らないわよ！ 待たせるユウが悪いんだから(怒)」

ハルナはそう言うと投げたカバンを取りに行く

ユウ「はあ…」

ユウは深くため息をつく

ハルナ「ユウ？なにしてるの？ おいてくよ？」

ユウ「へ？」

気がつくともハルナはすでにエレベーターに乗っていた

ユウ「はやっ！」

ハルナ「じゃ、先に降りてくから がんばって階段で降りてきてね
」

そう言うともハルナは先にエレベーターで降りていった

ユウ「おい、ちょつま…ここ20階何ですけど…」

こうしてユウは20階から1階まで階段で降りていくはめになった

（通学路）

ユウ「あ、足が…（涙）」

ユウは両足をもみほぐしながら歩く

ハルナ「全くだらしないわね」

ユウ「誰ののせいだと思ってるんだよ…」

すると後ろから黒髪の青年がきて、ユウの肩をポンと叩く

???「よつ、朝から大変そうだな（笑）」

ユウ「お、キョウヤ！」

ハルナ「あ、キョウヤ おはよ」

二人からキョウヤとよばれるこの青年の名は荒川
恭弥あらかわきょうや

二人のクラスメートでユウ達の親友である

それともう一人…

???「ハルナちゅわあゝゝん？ あいたかったよゝん」

金髪の青年が両手を広げハルナの方に走ってくる

ハルナ「はあ… うざい！」

そう言うとハルナはカバンを投げつける

???「ハルナちゅわあゝ…ぐへえ！」

ハルナが投げたカバンはうまいぐわいに金髪の青年にヒットし、金髪青年は気絶する

ハルナ「ふんっ」

キョウヤ「あはははは…」

今気絶している金髪青年の名は大谷 智也 おおたにともや

ユウ達のクラスメートであり親友

ハルナに恋心を持っているが相手にされない

ハルナ「こんなバカはほっというて早く学校いくよ」

そう言つとハルナは先に歩き出す

ユウ「キョウヤも早く行くぞ」

キョウヤ「あ、うん」

そう言つてユウ達も歩き出す

トモヤ「……………」

〽学校 校舎内〽

トモヤ「ハルナちゃん（涙） 俺を慰めて」 なぐさめて

トモヤはあの後ダッシュで追いついたのである

ハルナ「はあ… 疲れる…」

ユウ「だな」

そう言いながらユウは教室のドアを開ける

すると…

黒髪の少女がユウにむかって走ってくる

「???」ユウ「?」

ユウ「ゲッ!?!」

「???」ユウ「会いたかったよ」

そう言っていると黒髪の少女はユウに抱きつく

今ユウに抱きついてきた少女は鈴菜志玲奈すずなしれな

中一の頃からユウと同じクラスである。 ころ見えても弓矢の腕は
全国2位

ハルナ「ちょっと!あんなたち離れなさいよ!」

ハルナは無理やり二人を離そうとする

レナ「いや」絶対はなれない」

レナは離れようとしな

ユウ「レナっ。 ちよっ、 離れろって!」

レナ「ん、 ユウがそういうんだっ たら…」

そう言うと、ユウから離れる

ハルナ（こいつ、ムカつく…）

トモヤ「ハルナちゃ…」

ハルナ「あんたはしつこいのよおお！（怒）」

そう言うとハルナはトモヤをカバンで殴り飛ばす

トモヤ「なんで…、俺、だけ…ガク」

そう言うとトモヤは気を失う

キョウヤ「ははは……」

とかなんとかしているうちに担任が教室に入ってくる

（ガラガラガラ…）

担任「お前ら早く席につけ」

ユウ達はみなそれぞれの席に着く

担任「えゝ、実は今日からこのクラスに転校生が来ることになったんだ」

生徒A「マジか!？」

生徒B「楽しみだな」

トモヤ「先生！質問です！その転校生は女ですか？」

担任「残念、男だ」

トモヤ「何！？」

するとクラスメイト達は笑いだす

ハルナ「ばつかみたい…」

ユウ「アホだろ…」

担任「みんな静かに！じゃあ転校生を呼ぶぞ、入りなさい」

すると、黒髪で首にゴーグルをかけた青年が入ってくる

担任「え、この子の名前は赤嶺 あかみねえんま 炎真だ、みんな仲良くしてやれよ！」

生徒達「はい」

ユウ（エンマって言うのか…、てか首にゴーグルって俺とかぶってんじゃない…）

ユウはそんなことを考えながらエンを見ていると目が合う。

エンマ「…」

ユウ「…」

（やばっ、目あっちゃったし！！どーしよ、とりあえず…）

ユウはエンマにお辞儀してみる

が、エンマは違うところをむき、ユウのお辞儀をスルーする

ユウ（スルーされた、スルーとかマジ泣けるぜorz）

担任「じゃあエンマ、お前の席はあそこだからな、」

担任は一番後ろの空いた席を指さす。エンマは指定された席に着く

担任「じゃあ今から朝のホームルームを始めるぞ！」

ユウ（はぁ、ダルっ）

ユウは居眠りを始める

エンマはその様子をずっと見ていた

エンマ（あいつが…）

く休み時間く

ユウ「はぁ、疲れた」

ユウは頭を机に乗せながら言う

ハルナ「ずっと寝てたくせになにが『疲れた』よ」

ユウ「俺は机に座ってるだけで疲れるんだよ」

レナ「だったらレナが癒やしてあげる？」

レナはユウに後ろから抱きつくこととする

ユウ「やばっ」

そう言っていると、ユウはレナをよけて、ダッシュで教室から出る

レナ「逃げないでよ」

レナもユウを追いかけて、教室から出る

ハルナ「ちょ、あんた達待ちなさいよ！」

ハルナもユウ達を追おうとするが、目の前にトモヤが現れる

トモヤ「ハルナちゅわあゝん、俺と楽し…」

ハルナ「邪魔!!」

そう言っているとトモヤを殴り飛ばし、教室から出る

トモヤ「今日で…三回…目…ガクッ」

そう言つとトモヤは気を失う

キョウヤ「まあ、ドンマイ」

キョウヤは笑顔でそう言つと、みんなの後を追つて教室から出る

〽校舎内 廊下〽

レナ「ユウ〽 レナが癒してあげるよ〽」

ユウ「だからいいって言つてるだろ!」

ユウはそう叫びながら曲がり角を曲がる

するとそこにエンマがいた

ユウ・エンマ「!?!」

ドッシャーーン

廊下内に痛そうな音が響く

ユウ「イテテテテ…」

ユウはおでこを抑えながら立ち上がる

エンマ「……………」

エンマも同じくおでこを抑えながら立ち上がる

するとそこに、レナが走ってくる

レナ「ちよつ、二人とも大丈夫!？」

ユウ「大丈夫……じゃないかも」 涙目

そういつと、ユウは頭を抱えてしゃがみ込む

エンマ「俺は… 大丈夫…」

しかしエンマも涙目である

ユウ「確かエンマだったよな？本当にごめんな」

ユウは顔をあげて言う

エンマ「…大丈夫…」

そういつとエンマは教室のほうに歩き出し、ユウとエンマがすれ違う

エンマ（…放課後…、パソコン室で待ってる…）

エンマはすれ違いざまにユウにしか聞こえないほどの小声でそういつ

ユウ「んえ？」

ユウはいきなりそう言われたことにびっくりし、声が裏返る

するとそこにハルナとキョウヤがやってくる

キョウヤ「ユウ?どうかしたの?」

キョウヤはさつきすれ違ったエンマとユウを交互に見ながら尋ねる

ユウ「まあいろいろとな...」

(さっきのって...まさか、よびだし!?あいつ俺をパソコン室でボコボコにする気なんじゃ...)

ユウはさつきエンマに言われたことについて必死に考えていた

ユウ(だとしたらやべー!さっきのは100%俺が悪かったしな...)

ハルナ「ユウ...」

ユウ「え?何?」

ハルナ「鼻血出てるよ?」

ユウ「マジ!?!」

ユウが鼻を触ると、確かに鼻血が出ていた。ユウは手で鼻血をぬぐう

ハルナ「ちよっ、ハンカチぐらい持ってないの?」

ユウ「うん」

ハルナ「全く...、しょうがないわね」

そう言いながらユウに真白なハンカチを渡す

ユウ「おお！サンキュー」

そういうと、ハンカチを受け取り、鼻血をぬぐう

ユウ「ちゃんと洗って返すよ」

ハルナ「いや…もう返さなくていいから…血付いてるし…」

ユウ「あ、そう。じゃ、ありがたくいただくぜ」

そういうとハンカチをポケットに突っ込む

キョウヤ「じゃ、教室に戻るか」

ユウ「よっしゃ、俺が一番だ！！！！」

そういうとユウは走り出す…が、滑って転んで地面に顔面を打ち、
また鼻血を出す

一同「……………」

↓放課後 廊下↓

本日は、トモヤが早退（ハルナが殴ったため）で、レナが弓の稽古
ということで先に帰り、ユウ、ハルナ、キョウヤの三人で帰っている
キョウヤ「ユウ…、お前いつたい今日1日で何回鼻血だすんだよ！

？」

ユウ「5回……？」

ユウはあの後も、体育の時間にサッカーボールを顔面で受けたり、理科室の臭いを嗅いではいけない物質の臭いをかいだりして、鼻血を出していた。

ほんの数分前にも、壁にぶつかって、今も鼻血を出している最中である

ハルナ「ユウ？私があげたハンカチの色、何色だったか覚えてる？」

ユウ「え？白？」

ハルナ「なのに何！？このハンカチの色は！？真っ赤っかじゃない！！！！！」

ユウがもらったハンカチは鼻血のせいで真っ赤に染まっていた

ユウ「だってしかたないだろ？鼻血出ちゃったんだから」

ハルナ「出しすぎよ！！！」

キョウヤ「まあまあ、そんなに怒るなって」

キョウヤは間に入りハルナを落ち着かせる

ユウ「短気は損気だぞ」

ユウはキョウヤの後ろから顔を出してそう言う

ハルナ「余計な御世話よ！」

ハルナはそう言いながらユウの顔面を殴る

すると、止まりかけていた鼻血がまた噴き出す

ユウ「いつてええええ！」

ユウはそう叫びながら鼻を押さえる

キョウヤ「あゝ、やっちゃった……」

ハルナも怒りが収まり、態度が一変する

ハルナ「ああ、またやっちゃった！ユウ！？大丈夫！？」

そう言いながらユウに駆け寄る

ユウ「痛い……」

ユウは真つ赤なハンカチで鼻を押さえながら言う

ハルナ「ほんとーにごめんね」

ハルナは深々と頭をさげ謝る

ユウ「いや、エンマとぶつかった時と比べたら……、あ！？やっべ
！すっかり忘れてた！……！」

ユウはやつちまったって感じの顔をする

キョウヤ・ハルナ「どうしたの？」

ユウ「いや、実はさ、俺エンマに呼ばれてたんだった。っーわけで二人は先帰っというて」

そっいうとユウは鼻を押さえながらパソコン室へダッシュする

キョウヤ「いつてら」

ハルナ「いつてらっしやい」

キョウヤ達は適当にユウを見送る

パソコン室

ユウ「しつれーしまーす」

ユウはそう言いながらパソコン室に入る

エンマ「待ってたぞ…さいとうゆたか斉藤裕だな…？」

エンマは一番奥にあるパソコンの席に座っていた

ユウ「え、あ、うん…そうだけど…」

（あれ？何でおれの名前知ってんだ？）

エンマ「ユウ…お前はデジタルワールドの守護者に選ばれたんだ…」

ユウ「え…あの、言ってる意味が…よくわからないんだけど？」

（なんだこいつ！？まさか厨二病！？）

エンマ「今はわからなくてもいずれわかる…、とりあえずお前にはおれと一緒にデジタルワールドに行ってもらおう…」

エンマは、そう言っているとポケットからケータイのようなものを取り出し、パソコンにかざす。するとパソコンが光りだす

ユウ「うわっ！？パソコンがついた！？怪奇現象だああああ！！！」

エンマ「何を言ってる…行くぞ…」

そう言いつつ、エンマはユウを引っ張る

ユウ「えっ、ちょ！？まっ…！」

ユウはエンマに引っ張られてパソコンに吸い込まれていった

くくくくく

????「ユウ！おきてー！」

何者かがユウのお腹の上を跳ね回る

ユウ「うーん…お…、重い…」

そう言いながらユウはゆっくりと目を覚ます

「???」あは 起きた?

すると謎の生物はユウの顔に自分の顔を近づける

ユウは自分のお腹に乗っている生き物に気づく

「???」おはよ

ユウ「うわっ!?!」

ユウは急いでその場から離れる

「???」逃げないでよ、ユウ

謎の生物はそう言うとユウに飛びかかってくる

ユウ「うわあああああああ!?!」

ユウは謎の生物に飛びかかれて、その場に倒れる

「???」ユウ ずっと待ってたんだよ

謎の生物はユウのお腹の上に乗し、スリスリとユウの体に自分の体をこすりつける

ユウ「な、な、な、何なんだこいつ!?!」

すると近くの木の蔭からエンマが現れる

エンマ「やっと起きたか…」

ユウ「エンマ!？」

???「あ、エンマだ」

そう言うと、謎の生物はユウのおなかの上からおりて、エンマのほうに行く。するとエンマは謎の生物をなで始める

???「ん」

ユウ「エ、エンマ!？そいつ、いったい何なんだ!？」

エンマ「こいつはお前のパートナーデジモンだ、…名前は…」

ドルモン「俺、ドルモン よろしくな、ユウ」

ユウ「はあ?なんだよデジモンって!？お前が言ってることわけわからないぞ!」

ドルモン「俺が説明するよ。」

〜数分後〜

ドルモン「とゆ〜わけ」

ユウ「え〜と…つまり、お前はデジモンっていう生き物で、お前たちが住んでる世界がデジタルワールド…」

ドルモン「そう」

ユウ「で、そのデジタルワールドってのが崩壊の危機に陥っている…」

ドルモン「そう」

ユウ「で、なぜかはわからないけど俺の力が必要と…」

ドルモン「うん、ま〜そ〜ゆうこと」

するとユウはしばらく考え込む

ユウ「よし！わかった！俺がデジタルワールドを救ってやる！！」

ドルモン「ほんと！？」

ドルモンは目を輝かしながら聞く

ユウ「ああ、ホントだ！俺の辞書に『一言』という文字はない！」

エンマ「決まりだな…」

するとユウのポケットが光りだす

ユウ「うわっ！？なんだ！？」

ユウはポケットから光を放っているものを取り出す、するとケータイが光っていた

ユウ「ケータイ？」

するとケータイはすがたを変える、

ユウ「なんだこれ？」

ユウの手には赤い色をした謎のものが握られていた

エンマ「それはデジヴァイスだ…」

ユウ「デジヴァイス？」

ドルモン「そのデジヴァイスってのはね、選ばれた者の証みたいなもんだよ」

ユウ「へへ、そうなのか…」

そう言いながら、ユウはデジヴァイスをいじくる。

ピッ！

ユウ「あ、やべっ！？なんかおしちまった！？」

するとドルモンがデジヴァイスの中に吸い込まれる

ユウ「あ！入っちゃったけど！？」

エンマ「それはデジヴァイスの機能の一つだ…」

ユウ「へー、すげーな！で、どーやって出せばいいの？」

エンマ「リロードと叫べば出てくる…」

ユウ「へー、じゃ、リロード…！」

ユウはデジヴァイスを前に突き出しながら叫ぶ。するとドルモンが出てくる

ドルモン「ユウ（涙）いきなり閉じ込めるなんてひどいよ（涙）」

そう言いながらユウの足にしがみつく

ユウ「あはははは…、ごめんな。」

エンマ「デジヴァイスには他にもいろんな機能があるが、続きは明日にしよう…」

ユウ「そうだな、暗くなってきたし…、つーわけでドルモン、今日はもうサヨナラだ」

ユウは足にしがみついているドルモンを引き離そうとする

エンマ「何バカなこと言ってるんだ…、ドルモンも連れていくぞ…」

ユウ「え？」

第一話 〽冒険の始まり〽（後書き）

〽キャラクター紹介〽

名前 斎藤裕 （サイトウユウ）

性別

一人称 俺

パートナー ドルモン

性格 外交的で、誰とでもすくにうちとけてしまいう才能を持っている

勉強はかなり苦手だが、運動はそこそこできる。しかしカナズチ

〽パートナー〽

種族 ドルモン

性別

一人称 俺

性格 基本マイペース なので起床時間はかなり遅い

ユウにデレデレ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6773x/>

～XデジモンフューチャーズX～

2011年11月11日03時25分発行